

山と博物館

第55巻 第2号 2010年2月25日

市立大町山岳博物館



ヒマラヤ（ガネシュヒマール）が見える校庭

ネパールは今—ヒマラヤの山旅から—

羽田 栄治

今日、世界の情勢は激流のようですが、ヒンドゥー教を国教としたネパール王国もその例外ではありません。2008年5月、国政選挙の結果、240年にわたる王制は終焉し、「ネパール連邦民主共和国」となつて国政が変りました。王制廃止は、多民族、多宗教の色濃いネパール人の生活環境を大きく様変わりさせています。

さて、ネパールの自然を象徴するヒマラヤは、悠久にその姿を誇示していますが、地球温暖化と思われる氷河の退行現象は決して他人ごとではなく、ヒマラヤの自然を愛する岳人であればこそ危惧される問題です。

私が初めてネパールの土を踏んだのは1960（昭和35）年3月。報道担当として社会人山岳会初の海外登山「全日本ヒマラヤ遠征隊」（東海岳連隊）を約3ヶ月間取材しました。当時のネパールは王政復古して間もなく、政治的には不安定な時代でしたが、登山隊にはきわめて友好的でした。

あれから半世紀、ネパールは発展途上の国にあつて観光立国として成功しました。現在、ヒマラヤへは、かつての厳しい登山規制も緩和され、簡単な渡航手続きで毎年多くの登山隊が訪れています。ちなみに、この50年間、8000級級を含めて7000級級以上の高峰の登頂者は、1300人余と言われています。

カトマンズは、大きく様変わりをしました。今では世界遺産に指定されている町ですが、市内は人だらけ、家だらけ、車のラッシュ、排気ガスが充満。

ネパールの魅力、それは神々の座「ヒマラヤ」か。それとも、中世の香りあふれる建造物か、地方に住む素朴な人たちか。人それぞれ、この国ならではの魅力を発見することでしょう。

時を超えて50年。日本は経済的にも豊かになり、誰でも気楽にヒマラヤの自然に接することができるようになりました。やっとヒマラヤに行けた時代を甦らせながら、今ある平和な時代の幸せを本文から噛み締めていただければ幸いです。

（日本山岳写真協会会長）

ヒマラヤ今昔
——山と人——

羽田 栄治

ヒマラヤ黄金時代を迎える

「もはや戦後ではない」——この言葉が流行したのは1956年。国の近代化は、政治や文化より経済を先行させると言う「経済白書」が発表された。これより2ヶ月前の5月9日、もはや戦後ではない日本の復興を象徴するような出来事があった。日本人初の未踏8000峰「マナスル」初登頂のニュースである。登山界にとどまらず敗戦から10年余、戦後ではないと言いつつも復興途上にあった日本にとって明るいニュースとなった。



人もまばらなニューロード

現在、豊富な情報を基に自由にヒマラヤ登山を楽しめるが、当初の海外登山は、どのようにして行われてきたのであろうか。1960年3月初旬、初めてヒマラヤへ向った社会人山岳会、全日本ヒマラヤ遠征

長い間、鎖国が続いていたネパールが、王政復古したのは1950年、早くもヒマラヤ8000峰未踏峰を目指して各国の隊がひしめきあっていた。50年、フランス隊はアンナブル初登頂に成功、それは人類初の8000峰への記録となった。53年にはイギリス隊が宿願のエベレスト登頂を果たし、58年、日本の京大隊が、7000峰未踏峰チヨゴリザを登頂し、次々と巨峰が落とされ、ここにヒマラヤは黄金時代を迎えた。なかでもマナスル登頂の影響は、社会人山岳会を大いに刺激するところとなった。こうして、

彼らの会も逐次実力を蓄積し、独自にヒマラヤ登山隊を派遣するようになった。そのきっかけを作ったのは、

ヒマラヤ研究の第一人者であり作家の深田久弥さん。1958年3月、写真家の風見武秀さん、画家の山川勇一郎さん、そして医師の古原和美さんの4人で隊を結成し、ジュガール・ヒマールへと旅立ったことによる。

隊・東海岳連（伊藤久行隊長）の山行を通してレポートしてみよう。彼らの登山活動を撮った記録映像は、往時ヒマラヤ登山の様子を知ることができるアーカイブスの作品だ。

船で旅立ったヒマラヤ行き

ネパールが鎖国を解いて10年目。全日本山岳連盟ヒマラヤ遠征隊がヒマラヤの未踏峰ジュガール・ヒマール山群の主峰ビック・ホワイト・ピーク（レンボ・ガン・7083m）を目指してネパールに向ったのは1960年3月初旬。岳連初の海外遠征であった。

さて、この時代の海外登山はいかに大変な事業であったか、大掛かりな準備と煩雑な手続きなどから知ることができる。第1の難関は海外へ渡航するための手続。政府の渡航審議会が許可が下りない限り海外に出られない。



憩うポーター

審査にパスすれば外貨が割り当てられ、旅券が発給される。その間には所轄官庁への挨拶、さまざまな書類を持つては役所通い。第2の難関はネパール入国や登山許可書の申請、また登山装備、食糧、医薬品の通関手続きなど、とまれ日本を離れるための諸手続きを完全にクリアして、やっと船上の人となるわけだ。

もう、船上の人ともなれば遠征の半分は成功したと言っても決して過言ではなかった。先発隊は、1万トン足らずの船サンゴラ号、英印汽船の貨客船で多くの日本登山隊を乗せた由緒ある船。本隊は英国P&O所属の3万トンの豪華客船イペリア号だ。この船にはヒマルチュリに向う慶応隊とアビ遠征の同志社隊も同船していたので、船内は賑やかなものであった。イペリア号は、香港、マニラを経由してシンガポールへと、私たちは12日間の快適な船旅を楽しんだ。今思えば、船でヒマラヤ行きとは、なんとも贅沢な海外遠征のアプローチであった。

近くて遠いネパール・カトマンズまで25日間

シンガポールから空路、カルカッタへ。そして同地から夜行列車で北インドのパトナ・ジャンクションへ。パトナから、チャーター機でいよいよネパール入りをする。これまで写真か絵画でしか見たことがなかったヒマラヤが現実のものになるかと思うと胸が高ぶった。機体はインド平原を横切って山地に近づく。やがて機窓から西方雲の彼方にランタン、ジュガール、ガウリサンカールの峰々。初めて見るヒマラヤに興奮しながらカメラの



インダラワチ河を渡る一全員渡るまでに半日かかる一

シャッターを切る。
機体は高度を下げ、段々畑を眼下にしてカトマンズ空港に着陸する。空港と言っても、ベンベン草が生えているような滑走路とバラック風の建物が数棟、通関は至って簡単。日本を出発してから25日目。やっと着いたかと言うのが実感であった。

1988年には新築され、その名もトリプバン空港、国際専用ターミナルも完成、滑走路は拡張されジェット機も乗り入れるようになった。今では、バンコクや香港経由で2日もあれば、確実にネパール入りすることが出来る便利な時代である。

初めてのカトマンズは中世の町

初めて踏んだネパールの土。首都カトマンズは、政治、経済、文化の中心地と言うより



上るか下るだけの道を行く

キャラバン隊カトマンズを出発する

4月8日、いよいよポーター40人の大キャラバン隊がカトマンズを出発する。待ち焦がれていた氷河へのプロローグである。

特派員としてネパール入りしてから、取材はいよいよ本番。それは他の隊員と行動を共にしながらの取材活動であった。

大きな田舎を思わせた。街の中心地には王宮や古色蒼然とした多くの寺院が建ち並び、中世の面影が色濃く残っている。目抜き通りのニュー・ロードは歩く人たちもまばらで、裸足の人も少なくない。往来する車は、恐らく30年代フォード型であろう。車体を分解してインドから運んだと言う代物だ。旧王宮前の広場にも寺院が多く、周辺は土産物売りで賑わっている。狭い路地の店頭には日用品が雑然と並び、現代を遠く離れ中世の町に迷いこんだようだった。

ニュー・ロード近くの広場では、羊がのんびりと草を食み、人は木陰で昼寝を楽しんでいた。西へ2キロほど先の丘に立っているストゥーバ(仏塔)はスワンブナート。カトマンズの伝説を秘めた聖地である。寺院中央には、四方を見通す仏の眼を描いたストゥーバがそびえる。

さて、私たち遠征隊の宿は、インペリアルホテル。その名もインペリアルだけにかつて権力を極めたラーナ族邸宅跡の豪華な建物である。部屋は広いが、食事は名門ホテルの名

にしては全く粗末だ。夜、よく停電するのでロースクが欠かせない。このホテルはすでに取り壊され今はなく、最近の住宅事情では、ラーナ邸ばかりか次々と歴史的建造物が失われている。貴重な建物の修復や保存の声があるが、その対策は難しいのが現状だ。

キャラバンは、2年前の深田隊と同じコースである。ポーターの背負う荷物は、平均30キロ、彼らのほとんどは裸足だ。荷を背に長蛇の列して歩く姿は、人間貨物列車のようだった。野を越え、丘を越え、山国ネパールの道は登るか下るかであった。3日目、大きな川に出合った。橋がないので「ドンガ」と呼ぶ小舟で渡る。ポーターは怖がり、全員が渡り終えるのに半日かかった。川を渡り終え、急坂を登ると西北彼方に白銀の峰々が眼前に飛び込む。ランタン・ヒマールの峰々である。

快晴に恵まれた日が続く。道は乾燥し風が吹くと大変なほこりだ。水場があればポーターは帽子をコップ代わりに器用に飲んでいる。キャラバンも半ば、チベット人の集落にテントを張る。いつの間にかテントの周辺は人

だらけ。子供や娘さん達も、われわれのテントの中をのぞき込んでいる。夕食が始まると、彼女らの視線は並んだ食べ物に集中する。何を食べているのか、興味深い表情だ。髪の毛は赤い紐で飾り、耳飾り、腕輪、腹巻まで満艦飾の装飾。首から吊った籠には赤ん坊、あやしながらお喋りを楽しむ彼女たち。こうした出会いもキャラバンならではのことだろう。

村の入り口に建つチオルテン(仏舎利塔)に出合えば一息。タバコ好きのポーターたちには格好の休憩地だ。キャラバンも後半、山に登り谷を渡りジュガル・ヒマールを目指して歩き続けること12日間。樹林帯を抜け、急斜面をよじ登るとベースキャンプ地だ。前衛峰ブルビ・チャムムの威容が眼前に迫ってきた。岩と氷雪の峰が天空に屹立し、山容はさすがにヒマラヤの貴族を誇示しているようであった。



出会った村の女性たち

長かったキャラバン、一緒に歩いたシエルパやポーターたち、途中出会った村の人たち、みんな明るく気が良い人たちばかりで、厳しい風土から育まれた彼らの人柄を垣間見ることができた。それは、物ではなく仏や神、山への敬虔な祈りによるものである。

ジュガールの氷河を行く

キャンプの前に聳える中央山稜は、チベツト国境に続く無名峰で、いずれも6000級の山とは思えない秀峰だった。山容の素晴らしさに魅せられ映画用のフィルムも予想以上に廻る。終日氷河の中をルート工作に歩き回る隊員たち。巨大なクレバスを乗り越え、前進キャンプをつぎつぎと設営する。氷壁にはザイルを張る。カメラは、彼らの登攀の様子をつぶさに捉える。希薄な酸素の中、風雪や雪崩の危険を克服しながらシャッターを押し続ける。山の自然との戦いの毎日であった。



テントの中をのぞきこむ村人

5月中旬、ビック・ホワイト・ピーク(7083m)への最終アタックを試みた。天候が急速に悪化、吹雪に閉ざされ、ついに氷の割れ目でビバークを余儀なくされた。悪天候がしばらく続き、インド放送はモンスーンの来襲を告げる。山頂を眼前にしながらかくも敗退。不運にも未踏に終わったが、ルートの全容は明かになり、ヒマラヤ登山に多くの功績を残した。

撮ったフィルムはベースキャンプで現像し、ルポ原稿と一緒に日本に送稿する。そのためポストランナー(飛脚)がカトマンズから1週間かけてベースキャンプへ。もちろん日本からの便りを運んでくれる嬉しいポストマンでもある。今では、衛星通信でヒマラヤの山頂からも発信できる時代だ。その利便さを痛感する。

雪男の足跡に遭遇

4月下旬、第1キャンプから上部、主峰に続くブルビ・チャチュム氷河を偵察中、高度4880付近で、不思議な足跡に遭遇した。幅はおよそ20cm、長さはビッケル相当、約30cmくらいだ。最初に発見したシエルバのバサン・ブタールII号はイエティ(雪男)の足跡だと太鼓判を押す。1955年モニカ・ジャクソン隊が同じ場所でのイエティの足跡を発見している。

ヒマラヤには、未知の動物が住んでいることは確かなようだ。1953年に英国隊は、エベレスト付近の氷河上で、また1952年のマナスル踏査隊でもイエティの足跡を発見している。日本からも雪男発見のための遠征隊を幾つか派遣している。2003年の夏、イエティ専門家の高橋好輝さ

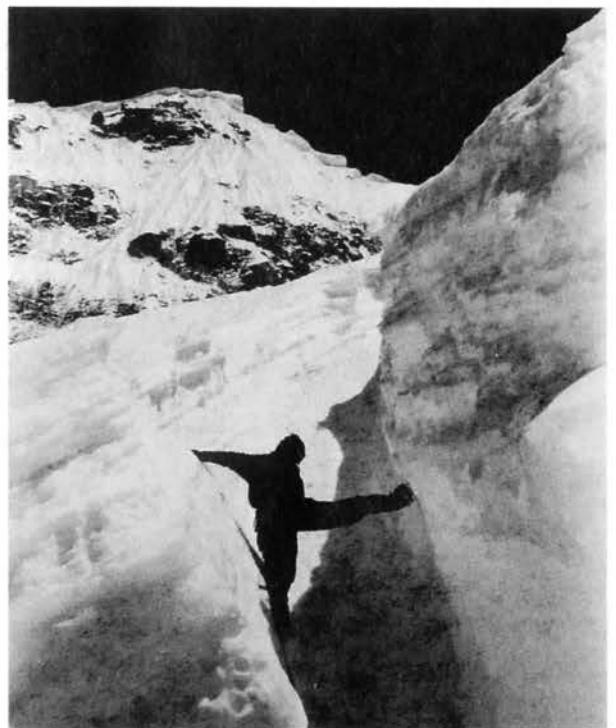
んは、「イエティ捜査隊」を結成、ダウラギリ周辺でイエティの実在を証明するため監視カメラで狙ったが、ついに撮影できなかった。人に好奇心がある限り「未知への旅」は続けられることであらう。

ネパールは今

時を経て半世紀、ネパールは、それぞれの時代の狭間で不穏な事件が相次いだ。2008年には、ネパールは王制を廃止し、マオイスト政権(ネパール共産党毛沢東主義派)を樹立して「ネパール連邦民主共和国」が誕生した。

政治や行政がどう変わろうともヒマラヤの自然は変わらない。高峰は悠久として白銀に映え、訪れる人々を魅了させることであらう。かつて、この国の時代の流れは牛歩のようであったが、近年では都会を中心に急速に変化し、住民たちのライフスタイルも変わってきた。子供たちの身なりも良くなり、表情も明るい。若者たちはお洒落な姿に変貌し街を闊歩している。しかし、首都カトマンズは、人口が集中し、文化的建造物が消えつつあるという。都市部の発達で地方を疎外し経済格差をもたらした。自然破壊という公害も生んだ。残念だが、車の排気ガスで街中からヒマラヤを望むことも少なくなった。

現在、かつての時代から想像できないほど



ルート工作する隊員-中央山稜-

多くの人たちが、観光にヒマラヤ登山を訪れている。どのような目的にせよ、世界遺産の多い古都カトマンズをゆっくり歩き、ヒマラヤ山麓のトレッキングを楽しみ、また地方の人と触れ合えば、本当のネパールを発見することである。

今年、ネパール初訪問からちょうど50年目。国は変わったが、人の心とヒマラヤの自然は変わって欲しくない。

(日本山岳写真協会会長)

山と博物館 第55巻 第2号
 発行 2010年2月25日発行
 〒398-0002 長野県大町市大町八〇五六一
 市立大町山岳博物館
 TEL 〇二六-111-0111
 FAX 〇二六-111-1111
 E-mail: smpok@city.omachi.naganano.jp
 URL: http://www.city.omachi.naganano.jp/smpok/

印刷 大系タイムス株式会社
 定価 年額一、五〇〇円(送料含む)(切手不可)
 郵便振替口座番号 〇〇五四〇七 一三二九三

